

## 人は宗教に何を求めるか

私がオウムをやめた理由わけ

永岡辰哉

(元オウム真理教信者)

今、ご紹介いただきました永岡辰哉でございます。まず最初にこういう機会を与えてくださったことに非常に感謝致しております。宗派として正式にこのような場を設けてくださったのは日蓮宗だけです。他の宗派もできれば宗派として、このカルトの問題に取り組んでいただきたいとこのように思っております。では少々聞きにくいかもしれませんが、せんがお聞きいただきたいと思えます。

一

まず、私がオウムに入った理由ですが、滝本太郎弁護士と私が共編著というかたちで書かせていただきました『マインドコントロールから逃れて』（恒友出版）という本の中に大まかに書いてはありますが、余りにも大まか過ぎますので、ここではもう少し詳しくお話をしたいと思います。

私が一歳半の時、三種混合の予防接種で全身不随になった時期があります。その後遺症で運動能力などに障害が生まれ、幼少の頃から薬を飲んだり、病院に通ったりしていました。このような理由から非常に運動が苦手で、今は

完治しておりますが、特に体温調節がたまに効かなくなることがありました。それで水泳がまったくできませんでした。そんな理由からいじめにあります。小学校、中学校あるいは高校といった学生時代に運動ができないということ、実に恥ずかしいとか、劣っているというふうに考えがちです。幸か不幸か非常に単純なこと、ただ走るだとか、ただ投げるといふ時は実に簡単にでき、中の上くらいにはなりました。ところが、コンピネーションするようなこと、たとえば走りながら投げるといふような物事が合わさったこととなりますと、まったくといっていいほどできなかったのです。これには、非常に努力を要しました。ところが、学校教育の場合には、どうしても一人に費やせる時間というものがあります。私は、だいたい人の二倍から三倍の時間がかかりますから、先生が次の工程に移れないので「お前はもういい、やめなさい」ということでストップさせられます。ただでさえ練習量が必要な人間が途中でストップさせられるわけですから、当然できないまま終わります。それがどんどん重なってきました。

そして、それが本当の意味でのいじめとしてピークに達したのが高校生の頃です。この頃は思い出すのも悲しくなるくらい、いろいろと暴力行為を受けました。実は、私は祖母に育てられました。ここに至りまして自分に悪い因縁、自分の目に見えない何か悪い力というものが働いているのではないかと考えるようになりました。当時は、オウム真理教ではなく阿含宗というのがマスコミを使って大々的に宣伝をして、因縁解脱というようなことを盛んにテレビ・ラジオなどでいっておりました。これに引かれて、私も何とかなるのではないかと思ひ、それに飛びついたわけです。そこには、それまでいろいろな専門書を読んできた自分の知っている仏教——とはいいますが、希望を持ったというか、目新しいからかたかが知れています——とはまったく別の新しいものが提示されていて、希望を持ったというか、目新しかったのです。こういう表現はいけなしかもしれませんが、私が一番魅力を持ったのは辛気臭い仏教用語を使っていなかったということです。そういうことで阿含宗にのめり込んでいくようになり、特に精神的なものオンリーになってきました。

話はオウム真理教に入る頃に進むのですが、その頃ちょうど精神的に非常に不安定になりました。その理由というのは、簡単にいえば自分の心の弱さがつくり出したことなのです。私は、インド哲学を専攻していました。わかっているのですが、語学がとてつもなく難しく、ただでさえ語学が不得意だったのにもかかわらず、サンスクリット語、パーリー語、ドイツ語、フランス語、英語と最低限五カ国語はやらなければいけないといわれまして、パニック状態になっていました。実は阿含宗には、その頃もう絶望しかけていました。阿含宗では、はじめというのは当たり前で、おさまることはありませんでした。私はそんなに頭の良い方ではありませんが、通っていた高校は馬鹿ばかりで、小点数の付け方もわからない奴もいました。こんな奴らのおかげでもって人生を棒にするのは嫌だと思っていましたし、当時、私の母が一生懸命支えてくれたのですが、やはり「その通りだ、馬鹿らしいことだ。」といっていました。それで、連中には体では勝てないので、頭で勝つてやろうと思つて一生懸命勉強しました。その結果、三年生の夏休み頃にじめがピタリとなくなりました。その理由は、所謂じめっ子といわれる連中は、その頃になると就職しなければなりません。下手な大学の入試問題よりもよほど難しい、決して常識とは思えない常識問題なるものをやらなければなりません。となりますと、頼りになるのは今まで馬鹿にしている、散々殴ったり蹴ったりしていた私になるわけです。そのお蔭で——勿論周りのいろんな協力があつてのことです。それを忘れてはいけません——自分の努力の結果が身を結んだということを経験していたわけです。そういうことから、阿含宗には絶望していたわけです。

一一

そこで、「もう阿含宗では駄目だ。じゃ何か他のものは……。」といつて、本屋さん巡りをしました。ここで運悪くオウムの本にめぐり遭つたわけです。当時、実際にオウムの本を見たのは一九八七年の九月頃かと思います。その時

見たものは、非常に平易な言葉で書かれていたということです。阿含宗の時よりもです。阿含宗の場合には、何だかんだいって突っ込んだ内容になりますと漢文が出てきます。ところが、オウム真理教の本は突っ込んだ内容になると漢文ではなくて、サンسكريット語や仏教英語といった横文字が出てくるのです。これは、私たちの世代というか、横文字に慣れた者にとってはわかりやすかったような気がします。その上、内容が非常に私には衝撃的でした。たとえば、「悟りと解脱とは違うものだ」と、こんなことは今までどんな仏教書——勿論こんなことはいっていませんから当たり前ですが——にも書かれていません。ところが、「そうだ」という実に新しい問題提起というものを見せられるとグラグラとくるのです。今まで出会ったことのないものに遭ってしまおうと、「これだ」というふうに思い込みをしてしまふ。それで、一辺話を聞いてみようかということになりまして、話を聞きに行きました。そこでいわれたことは、修行云々という話ではなくて、今冷静に考えてみますとテクニクだったのかなと思うのですが、実はほとんどがお金の話だったのです。その担当した人がいうには、「オウム真理教のいうことを一から十まで全部やって、もし何の効果もない、あなたの精神的不安定が解消されないというのだったら、交通費を含めてみんな返してあげます。」と、ここまで彼らは私にいました。そこまでのことだったなら、ちよつと道場を見た感じが怪しげでしたが、お金を返してくれるのならいいかなと実に安易な発想で、その場では即答はしませんでした。結局一カ月後くらいに入信したわけです。

当時は少数精鋭になっていまして、蘇生乱造という形でやたらにお金を取ってイニシエーションをするというようなことではなかったです。個人個人の悩みについて一応は話を聞いてくれて対応策を出してくれました。しかも、何よりも魅力だったのは、それが正しいかどうかはわからないにしても、自分の持っている疑問だとか、あるいは問題というものに対して、その場でもって解決策を出してくれたことです。オウム真理教でいえば、在家の信者はバクティ、出家者はオウムワークと表現するのですが、とにかくオウム真理教の利益になることをするということが功德である

といひます。そして、その功德になることをやれば、精神は安定するのだといふことを目の前でもっていいいます。たとへば、「ピラをひたすら折り続けることによつて心は安定するのだ」といふことを、その場でもって提示してくれるのです。それが、真理だとか、宗教的に正しいかどうかはわかりません。しかし、困つてどうしようもない時に、その場でもって解決策を出してくれる。このことは、物凄く私あるいはその当時の人たちにとつて希望といふものを見出してくれたのです。私にとつてオウム真理教といふのは、なかなか口にするのは難しいのですけれども、宗教的といふ意味だけでもし限定させていただけるのでしたら、最高の縁ではなかつたかと実は思つております。

誤解してもらつては困るので補足説明をさせていただきますが、チベットの方でダルマの王といわれたロン・チェンバという方がおります。この方がこんなことをいつております。

「傷つけられて初めて、真理と教えに巡りあうことができた。解脱の道を示してくれた仇なす者たちよ、あなた方に感謝しよう。苦しみを味わつて、真実の教えと巡りあうことができた。心に静寂を与えてくれた苦しみとあなた方に感謝しよう。恐るべき悪縁に出会い、真実の教えと巡りあうことができた。不動の道を与えてくれた悪縁とあなた方に感謝しよう。」

私にとつてオウム真理教というものは、この仇なす者たちであつて、悪縁なんです。その意味で最高の縁であつて、決してオウム真理教が正しいということではありませんので、誤解のないように一言申し添えておきます。

確かにオウム真理教に出会わなければ、私の父親はVXガスをかけられるというようなことはなかつたでしょう。家庭が非常に混乱して、バラバラにさせられるようなことはなかつたです。しかし、後ろを振り返つたら駄目なんです。私たちは決して仏陀でもないし、ボディーサットヴァでもないし、あるいはタイムマシンを持っていませんから、過去に行つて物事を変えることなどできないわけです。だつたら、前を見るしかないのです。かといつて、過去のことを忘れることも絶対できません。なぜならば、これによつて亡くなつた方々がたくさんいるからです。自分たちが

行なってきたことによつて、たくさんの方が亡くなつてしまつたわけです。それを忘れることは絶対にしてはならないのです。但し、誤解を恐れずにいわせていただくならば、彼らは絶対に帰つてきません。それならば、今自分のできることをやってみていくしかないと思います。ですから、このような稚拙な話ではありませんけれども、こうやって話させていただいているわけです。

## 二二

オウム真理教の人たちは、実に「今」を大切にしません。それは間違つていると私は思います。仏教というのは、常に「今」というものを捉えてきたのではなからうかと思うのです。仏陀釈迦牟尼がいらしゃつた頃は、所謂バラモンといわれる人たちが世の中を支配していました。ですから、それらを一〇〇パーセント否定するということはありませんでした。彼らの習慣というものも一部取り入れたりしています。大乘仏教運動なるものが、紀元一―二世紀に起こりました。その時には、所謂小乗といわれる人たちが自分のことだけしか考えないで、お釈迦様が在家の人であるうと誰であろうと、乞食であろうと何であろうと手を差し伸べてきたということを忘れて自分勝手に走つた。これではいけないということで大乘仏教が起つてきたと、ものの本を読んで習いました。それは、「今、何が必要か」ということを仏教徒たちが真摯に考えてきた結果だと思ひます。大切なのは「今」だと思ひます。ですから、ここにいる皆さんだけではなく、これは宗教だけのことではないかもしれないかもしれませんが、今に合つたことをやるべきではないかと、おこがましくも思うのです。マンガではありますが、こんなことが書いてありました。

「身は土に、心は虚空に、されど人の意志は人に帰す。残された者は決して無駄死にすることなく、その志を實現させるべきである。」

くだいようですが、これはやはり常に考えて行かなくてはならないのではないのでしょうか。

オウム真理教から出た後ですが、この時は非常に不安定で、周りから見ても大変だったと思います。両親を含めて周りの人たちは苦労したと思います。しかし、こういう言い方は失礼かもしれませんが、今のようにならなくていい人たちはほとんどいませんので、自分一人で調べて自分一人でやってきたつもりです。これが実は今の私をつくっているのではないかと思うのです。というのは、つまり一人でやってきたということは、自分の頭で考えるということをしなればならなかったということです。カウンセリングなどということは私——自分自身も本当はカウンセリングをしていただかなければならないような立場ですから——にはできませんから、話し合いという形でできません。しかし、現実に現役の信者さんたちと話をする時、常に彼らは人のいうことを鵜呑みにしてきたのです。それは、よく考えてみますとオウム真理教だけではないのです。今の教育のやり方、あるいは家庭の躾けもそうかもしれません。いわれたことを鵜呑みにしなければならぬのです。そうでないと、自分の意志で物事を考えて新しい解釈をしようものなら、あつという間にはじき出されてしまうのです。社会に出るから、これをやらないと逆にはじき出されますが、社会に出る前の学校ではこれをやってはいけません。所謂「詰め込み方式」というのがありますけれども、私は「詰め込み選択方式」というふうに行った方がよいと思います。つまり、情報を馬鹿みたいに詰め込む。そこから、正しいかどうかはわからないのですが、正しいといわれているものを素早く選択をして行動に移す、あるいは答案用紙に書くといった機械的作業に慣れていたために、自分で考えるということをしなかった。これが最大の原因ではなからうかと思っています。

その後、オウム真理教に決定的に違うなということが二つありました。教義の問題についてはここではないかもしれませんが、実は『イニシエーション』（オウム出版）という本の冒頭にこんなことが出てきます。

彼（麻原彰晃）が、ダライ・ラマに「あなたは、ボーディー・チッタを持っている。だから、あなたは日本に真の仏教を広めなさい。」と、いわれたと書いてあります。本当にこんなことをいったのかということで、私の両親、江

川紹子さん、カメラマンの福田さんと私の五人でインドのグラムサーラに行ってきました。そこで確認を取ろうと思ったのですが、運悪く私たちの着いたその日から世界宗教大会がありましてグライ・ラマに会えませんでした。そのかわり、現アジア太平洋地区十四世グライ・ラマ代表カルマ・ゲリツク・ユートツクという方がおりまして、彼が當時宗教次官をしていましたので、このことを聞いてみました。こんなことに気がつかなかった自分に本当に情けなくなりましたが、「私たちはゲールク派ですよ。何で他の宗教をやっている人に宗教を広めなさいなんていうことをいいますか。」と、あつさりといわれまして、なんて自分は馬鹿なんだろうかとつくづく思いました。しかし、先程もいいましたように、自分の足で行って自分で確認したということが非常にためになったということが、一つの大きな授業料だったなと思っております。

もう一つは、薬事法違反を彼はしました。彼はその時に、「原価が非常に高いのだから、決して高くない」といきました。彼の売った飲み物というのは、「風湿精」とか「青竜丹」という名前のものを売っていました。一本三万円から五万円するものです。その中に入っているものが、麝香とか虎骨などという漢方薬です。彼がいうには、麝香がグラム七千円、虎骨がグラム十万円だそうです。私の父親が神田の間屋さんに行ったところ、麝香がグラム七円、虎骨がグラム百円ぐらいだったといえます。父は、「私はこうして調べてきたが、信用できないだろうから自分で行って調べてきなさい。私が指定したところは、裏で手を回しているかもしれないから、この当たりがだいたい神田の間屋街だということだけは教えてあげるから、後は自由に十軒でも二十軒でも好きなだけ回って調べてきなさい。」といわれまして、実際三軒くらい回りましたが、父のいっていた金額とまったく同じでした。ここで、父がよくいうことなんです、「法を説く人間が、たったひとつの嘘もついてはいけないのではありませんか。」と、確かにそうです。身の保身という嘘は、絶対に法を説く者はしてはいけないと私は思います。嘘をつくというか、方便としていうのは、法華経の代名詞的な教えとしてあります。それは、お釈迦様がここでもって嘘をつかねばならないという時にやむを



えずつくわけで、自分の身がいとおいしいからつくわけではないということは、私以上にご存じと思います。

このような理由から、麻原彰晃——もう松本智津夫ですね——という人間のいうことは一字一句たりとも信用することはできないと考えるようになりました。そこで、本当の意味でオウム真理教というものから私は決別できたわけです。

#### 四

今まで私が宗教というものに求めていたものは、「平安」というものかもしれませんが。「解脱」あるいは「悟り」とは同意義語だと私は思います。もし、こういうものが達成されるものならば、世の中のどんなに煩わしいことにも心を動かされることなく、静かに生きていけるといって、そういったことを当初は求めていたのではないかなあと思いますが。今、宗教に求めることというのは、はっきりいって自分でもよくわかりません。何を求めるべきで、何を求めてはいけないのか。ただ、一ついわせていただくならば、たぶん「寛容性」ではなかるうかと思えます。どんな悪人であろうと、善人であろうと分け隔てなく受け入れてあげるといって寛容性だと思えます。その平安の求め方というのは、宗教によっても違いますしその定義も違いますが、しかし寛容性ということについては、おそらくどの宗教でも通用することではないかと思えます。もし寛容性というのがあれば、宗派というものも超えられるし、人種も超えられるし、宗教だつて何だつて超えられるのではないかという気がします。

それから、もうひとついっておきたいことがあります。今の人たちというのは、非常に極端だと思えます。つまり、自分も含めてなんですが、物事がある意味でいうと真正面からしか捉えることができないう人、そうではなく徹底的に穿つて見る人と非常に極端に別れています。しかし、穿つて見る人でも実はそうした精神性というものを一〇〇パーセント否定しているわけではありません。たとえば、占いとかお呪いの類は、信じたりある程度指針にしたりしてい

ます。そのよい例が、血液型占いか星座の星占いなどは、どういふわけか無条件に信じていても「あいつは怪しいではないか」とはいわれません。そういつた逃げ道は残してあります。ところが、大まじめに心の問題を語ろうとすると、全く相手にされない、怪しい奴だというふうなことになってしまうわけです。この辺の二分化というのが、だいたい問題があるのではないかと思えます。

それから最後に、「家」というものについて話をさせていただきたいと思えます。というのは、絶対に家というものからは離れることはできないわけです。つまり、家庭から出たとしても次はオウム真理教という家に行くわけです。やはり、そこは自分の安心できる家なんです。それはあくまでも家から離れて物事を考えることはできないという、日本独特の民族性といったらオーバーかもしれませんが、この事も考えておかないとこれから物事を考えていく時に難しいのではないかと思えます。

これで、私の話を終わらさせていただきますと思います。ありがとうございました。(拍手)